

Riho  
のドイツ  
便り



No. 76

## エネルギー協同組合、快調な伸び

ドイツではエネルギー協同組合という形で再生エネルギーにかかわっている人々がいます。組合員が出資し、発電や熱製造にたずさわるので、エネルギー分野の市民参加として人気があります。再生可能エネルギーのみを供給する南ドイツのシェーナウ電力会社も母体は協同組合です。ドイツ組合協会によると2006年から2013

年の間に718のエネルギー組合が新たに設立されました。

もともとドイツでは100年以上前から、送電線や地域暖房を市民組合が運営してきた歴史があります。2005年以前に設立したのも含めると組合は約1000あるといわれています。2000年に始まった固定価格での買い取り制度(FIT制)により、確実に採算が取れるようになり、倍々で増えてきました。

上述の718組合の会員総数は約14万5000人で、その92%が一般市民です。大半は発電関連ですが、中には熱(バイオマスなど)や送電線を扱っているところもあります。組合全体では、年間83万メガワット時を発電し、23万世帯分をまかっています。会員による出資総額は4億7000万ユーロ(660億円)で、借入れを含む投資額は13億5000万ユーロ(1890億円)にのびります。このように一般市民の参加が活発なのは、他国ではあまり例がありません。

組合の大きな利点のひとつに、自分たちの理念を反映できるということがあります。北ドイツのある組合は、太陽光発電による電力を動物園や市庁舎に供給しています。ソーラーパネルは安い中国製ではなく、あえてドイツ製を選びました。1キロワット時あたり数セ

ンが、会員のひとりには「組合は企業とは違う。安が目的ではなく、持続可能な社会を実現することだから」と語っています。地元へ根ざし、自分のお金がエコロジカルなことに使われることに意義があるのです。

けれど今春成立した新政権により、将来再生可能エネルギーの買い取り量制限と買い取り価格の抑制が決まりました。自己発電自己消費の電力に賦課金を課す案など、市民参加が減ると大きな批判を浴びています。



ハノーファーでも市民参加でソーラーパネル

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂



### ドイツで子育て

ドイツでは運動会、文化祭というのはありません。学校は昼で終わり、先生もさっさと帰るので、クラブ活動はほとんど外に委託となります。

先日、明の小学校でサーカスがありました。学年混合グループで、アクロバットやコメディーなどに挑戦。プロの指導を4回受け、週末にサーカスのテントで本番となりました。このプロジェクト自体にかなりお金がかかるため(担任談)、予算の都合で4年に1度しかできません。しかも発表会を見るには7ユーロ(1000円)の入場料がかかります。これが文化祭の代わりなのですね。

ドイツでは校内の掃除も業者任せだし、子どもが目的のために継続的に何かする機会が少ないように思えます。教師の負担の大きい日本式がいいと一概にはいえませんが、一体感や達成感を得る機会が少ないのは残念。

しかし、明は組み体操をみんなと披露し、大喝采を受けて大満足。きらめくライトの中、本物のピエロと舞台上立つのは、子どもにとっては最高の経験なのだろうと思いました。